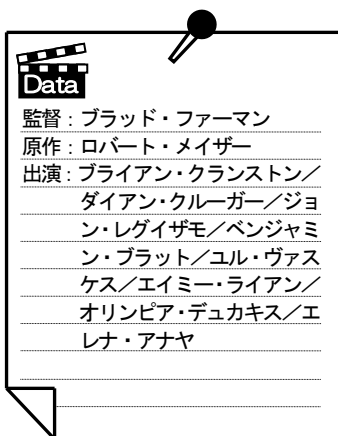




👁️👁️ みどころ

あなたは1980年代に全米で猛威を振るった南米コロンビアの麻薬王パブロ・エスコバルを知ってる？それを知った上で、その当時に合衆国関税局のこんな「潜入捜査」に注目！

スパイ映画にみるスパイ活動ぶりは21世紀の「前後」で大きくサマ変わりしたが、『インファナル・アフェア』三部作（02年～03年）や昔の伊賀忍者の「潜入」ぶりに比べて、本作の主人公メイザーの潜入捜査の特徴は？また、彼の任務感は・・・？

誰でもこんな仕事はもう2度とイヤ、と思うはずが、本作に見る、ホントにホント？と思うような大成果の後、彼はなお現役を・・・！

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□■実話に基づく物語！ターゲットはあの麻薬王■□■

私は1980年代に史上最大といわれる犯罪帝国を築き上げた南米コロンビアの麻薬王パブロ・エスコバルの名前とその実像（？）を昨年3月、『エスコバル 楽園の掟』（15年）を観てはじめて知った（『シネマルーム37』未掲載）。そして、そこでみるエスコバル像は、『ゴッドファーザー』三部作でマーロン・ブランドが演じたドン・ヴィットー・コレオーネと同じように、巨悪の存在ながら家族の絆を何よりも大切にするファミリー思いの一面を持っていることにビックリさせられた。アメリカにとってエスコバルの麻薬販売がコロンビア国内にとどまっている限りは問題ないが、アメリカ国内で流通する麻薬を中心とするドラッグのほとんどがエスコバルの組織を経由したものだとなれば、それは由々しき大問題だ。

アメリカではC I A（中央情報局）とF B I（連邦捜査局）が有名で、昨今は元C I Aのスパイだったエドワード・スノーデンの活躍が有名となり、映画『スノーデン』（16年）も大ヒットした（『シネマルーム39』126頁参照）。しかし、1980年代では、コロンビアの麻薬王エスコバルを壊滅するため、合衆国関税局特別捜査官のロバート・メイザーが行った「潜入捜査」が有名らしい。これはロバート・メイザーの回想録にまとめられているそうで、本作はその「実話に基づく物語」だ。さあ、本作に見るロバート・メイザー（ブライアン・克蘭ストン）が行う潜入捜査のターゲットはコロンビアの麻薬王エスコバルだが、さてその展開は？

■□■「潜入モノ」の代表作といえば？本作との違いは？■□■

「潜入モノ映画」の代表作といえば、誰でも『インファナル・アフェア』（02年）（『シネマルーム3』79頁参照、『シネマルーム5』333頁参照）、『インファナル・アフェア～無間序曲～（INFERNAL AFFAIRS II）』（03年）（『シネマルーム5』336頁参照）、『インファナル・アフェア III／終極無間』（03年）（『シネマルーム7』223頁参照、『シネマルーム17』48頁参照）の計三部作を思い出すはずで、これは『ディパーテッド』（06年）としてハリウッドでもリメイクされるほど大人気を呼んだ（『シネマルーム14』57頁参照）。

しかし、この代表作と本作との「潜入モノ」としての最大の違いは、『インファナル・アフェア』三部作では、警察官がマフィアの組織に潜入するのとは逆に、マフィアから警察への「潜入者」も登場し、警察とマフィア互いの腹の探り合いと騙し合いが大きな見どころになっていたこと。それに対して本作は、合衆国関税局特別捜査官のメイザーが一方的に「潜入者」となってエスコバルの犯罪組織に入り込み、その壊滅作戦のために情報を集める物語になっているので、まずはその違いをしっかりと確認しておきたい。

■□■同じ潜入者でも、時代によって大きな違いが！■□■

『インファナル・アフェア』第1部が香港で初めて公開されたのは2002年だったから、情報の集め方や連絡の取り方等がその時代を反映にしたものになっていたのは当然。また、近時のパソコンでの情報処理のスピードの進化には目を見張るものがあるから、直近の『スノーデン』における情報処理は私には到底理解できない高レベルになっていた。

しかし、1980年代の潜入者メイザーの行動ぶり（潜入ぶり）を見てみると、その大半の武器は録音テープ。しかも、今私たちが日常的に使っているICレコーダーもない時代だから、メイザーが使う小型の録音テープもリール式の録音テープだし、合衆国関税局の本部で使っている大型の録音テープも、私たちが学生時代に音楽の録音で使っていた大型リールの録音テープだ。他方、パスポートの偽造ぐらいは潜入捜査のイロハだろうが、メイザーがボブ・ムッセラと名前を変え、大富豪に成りすましてエスコバルとの接触をと

るという展開はホントにホント？

さらに、本作後半にはメイザーは「潜入捜査ははじめて」という美人捜査官キャシー・アーツ（ダイアン・クルーガー）を婚約者だと偽装して、エスコバルの懐深く潜入していくが、これは今なら二人が入るホテルの部屋に盗聴器を仕掛ければ、この2人の婚約はインチキで2人とも当局の「潜入者」であることはすぐバレバレになるはずだ。

なるほど、時代によって、つまり各種技術の進歩によって、潜入のあり方はこれほど大きく変わっているわけだ。そのため、本作は始めから終わりまでハラハラドキドキの連続だが、1980年代の古めかしいやり方であるため、どこか微笑ましい感じも・・・。

■□■こんな仕事はもうイヤ！普通はそうだが・・・■□■

本作でメイザー役を演じたブライアン・克蘭ストンは、『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』（15年）（『シネマールーム38』123頁参照）で、素晴らしい怪演をみせた遅咲きの名優だ。「ハリウッドに最も嫌われた男」と言われながら、脚本家のダルトン・トランボは多くの脚本を書き、「マッカーサー旋風」による「赤狩り」の後、1960年に名誉回復した後も1976年に死亡する直前まで脚本家として精力的な活動を続けたそうだからすごい。まさに、「正義は勝つ！」「努力は報われる！」の典型だ。

同作に見る「脅威」は、「マッカーシズム」による「赤狩り」という「外からのもの」だったが、本作に見るメイザーの「脅威」は、自ら選んだ「潜入捜査」という仕事によってもたらされるもの。もちろん、それを覚悟のうえでメイザーは大富豪のボブ・ムッセラに成りすまして、エスコバルの組織の中に少しずつ入り込んでいったわけだが、その途中で何度も危機に遭遇したのは当然。もし、メイザーの身分の偽装がバレたら即、命がないのは当然だし、ストーリー展開の中では文字どおり危機一髪のシーンが何度も登場するので、それに注目！

すると、こんな仕事はもうイヤ！誰でもそうそう考えるのは当然。しかも、本作を観ていると、メイザーはこの仕事を最後に潜入捜査の仕事は辞める、と妻に固く約束していたはずだ。ところが、意外に（？）コトがうまく進み、メイザーたちの潜入捜査に基づく大仕掛が大成功を収めると・・・そこでメイザーにはさらなる欲が湧いてきたらしい。その結果、死ぬまで脚本を書き続けたトランボと同じように、メイザーもマネーロンダリング（資金洗浄）を摘発する「潜入者」としての仕事をその後もずっと続けたそうだから、そのタフネスぶりに唖然！

■□■「美人すぎる潜入捜査官」にも注目！■□■

つい先日「高野連」（公益財団法人 日本高等学校野球連盟）の理事にアート引越センターの寺田千代乃氏が就任したところ、久しぶりに「女性初」という冠が躍った。これは、日本では女性の社会進出が遅れていることの一つの表れだが、他方では女性特有の現象と

して、「美人すぎる警察官」とか「日本一美しい市議会議員」等の表現があり、週刊誌に取り上げられることがある。そんなゲスの視点(?)で本作を観れば、本作には「美人すぎる潜入捜査官」が登場するので、それに注目!

それが本作後半、メイザーがエスコバルの麻薬組織の大幹部ロベルト・アルケイノ(ベンジャミン・ブラット)の懐深く入り込むについてメイザーの婚約者になるのが、同僚の潜入捜査官であるキャシー・アーツ。それを演じるのが、『トロイ(TROY)』(04年)、『シネマルーム4』59頁参照)、『イングルアス・バスターズ』(09年)、『シネマルーム23』17頁参照)で私が注目した、ドイツ人の美人女優ダイアン・クルーガーだ。

メイザーの方は長年の潜入捜査の経験にもとづく度胸やハッタリでエスコバルの麻薬組織の幹部とのご対面を次々とこなしていくが、キャシーの方は美貌はもちろん、数か国語をしゃべる能力や人並み外れた記憶力、そして状況に応じた演技力等が武器になる。しかし、それでもはじめての潜入捜査は大変だ。

ホテルの部屋の中に仕掛ける盗聴器がない時代だから、毎回危機一髪のところを切り抜けている2人は部屋に戻るとひと安心できているようだが、もし敵側がホテルの部屋の中をちょっとでも監視する気になれば、2人のお芝居はたちまちバレてしまうから、それを見ている私はずっとハラハラドキドキ……。本作では、そんな美人すぎる潜入捜査官にも注目!

■□うまく行きすぎでは?これはホントにホント?■□

本作でメイザーを演じる名優ブライアン・克蘭ストンは、再三迫ってくる危機に直面した時のハッタリ顔とそれを乗り越えた時の素顔の差が面白い。ブライアン・克蘭ストンくらいの名優になれば、ホンモノの潜入捜査官もできるのでは?思わずそんなふういうならせる彼の演技で本作をぐいぐい引っ張っていくので、それに注目!

それはそれで十分認めるのだが、それでも私は本作の潜入捜査のあまりの成功ぶりを見ていると、少し懐疑的になってくる。とりわけ、メイザーが潜入捜査中であっても、時々自宅に戻って妻と一緒にくつろいだり、合衆国関税局本部に出向いて幹部に録音したテープを渡したり、打ち合わせをしたりする姿を見ていると、ホントにこんなことをして大丈夫?と思えてくる。『インファナル・アフェア』三部作では、2年も3年もマフィア側や警察側の組織に入り切り、24時間その中の人間になりきっていたのでは……。まあ、本作の当時は時代がまだそれなりに甘かったのかもしれないが……。

しかして、本作ラストで、結婚式に出席してくれたアルケイノをはじめとするエスコバルの麻薬組織の幹部たちを一網打尽にするシークエンスを見ていると、いくら何でもこれはうまくいきすぎではの感がさらに強くなる。これは、ホントにホント?とりわけファミリーを大切にするアルケイノやアルケイノの家族がメイザーやキャシーをホントの家族同然に信頼し、心の底から喜んで2人の結婚式に参加してくれていただけに、それをすべて

インチキだとわかった時のアルケイノやアルケイノの家族たちの怒りは・・・？それを考えると、俳優は人を騙していくらの商売だと割り切れても、潜入捜査官という仕事に少し割り切れない気持ちも・・・。

2017（平成29）年5月24日記